大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

G・ベルナノスの『よろこび』における風景の変貌 2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天羽, 均 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009999

G・ベルナノスの『よろこび』における風景の変貌 2

天羽　均

「この穏やかな風景なにもかもが、動かぬ光のなかで、獲物を狙う大きな動物のように、巨大に、虎視眈眈としたものに変貌して見えた。かつて彼女は広大な都市の連なりを前にしたとき、同じ恐怖がこみあげ、ただちに抑えたことがあった。しかしこの地球そのものが、人間の欲望によって形づくられ、罪によって繰り返し捏ね回され、強力で、貪欲な、罪の大地だった。」(JOIE p.604)

1

「『よろこび』における風景の変貌」[1]において、『よろこび』第一部に見られる風景の変貌が、主人公シャンタルと彼女を取り巻く日常世界との関係の変貌に対応していることを見た。

こうした変貌の契機となったのは、シャンタルの立会ったシュヴァンスの臨終での経験である。現世的な野心をもたぬつましい娘は、神に求めた安息を拒否されたシュヴァンスの臨終により超自然的幻滅を経験する(cf. JOIE p.562)。それは「人生が幼子の無邪気な無頓着を永遠に打ち砕き、突然決定的な選択を迫り、よろこびを瞬時にしてあきらめにかえる日」(JOIE p.598)であった。

この経験から彼女を取り巻く世界の変貌が「風景の変貌」として立ち現われる。

「そして突然、これらのあまりに輝かしい、あまりに感動的な風景、夕闇にたちまち飲みこまれ、そして、ゆっくりと文目も分かたず再び姿を現わし、夜の淵から再

び立ち昇るかのような風景にも似た、狭く、親しい世界、そこで彼女が生まれ、暮らしてきた世界は、新たな相貌を見せていた。ものそのものが、彼女には見知らぬものになっていた。このもったいぶった、古めかしい、ありふれた、高貴さのない真面目くさった、アカデミックで金持ちの教授然とした調度までもが。」(JOIE pp.562,3)[2]

このようなシャンタルの内面に生じた日常生活情景の変貌は、父親の見慣れた相貌をも亡霊の群れのなかに失わせた(JOIE p.563)[3]。譫妄状態にある祖母の相貌の一つ一つに、シャンタルは自分の祖先の歴史を読み取る(JOIE pp.614,5)[4]。それはムシェットがドニサンから開示された人類の太古からの物語(歴史)(SSS pp.204-207)にも似ている。

第二部の冒頭は、第一部の最後(Ⅰ－5)が使用人たちの会話で終わっているのと対照的に、アカデミー入りを目論むド・クレルジュリーに夏のノルマンディに招かれた客たちの、サロン的会話で始まる。ド・クレルジュリーの屋敷を取り巻く情景を表す風景は、互いに自己の世界から触手をのばし相手を探り合っているエゴイスティックで空虚な社交的世界より、はるかに濃密な空気をはらんでいる。灼熱の太陽の昼の活力を分解する夜の力は、『闇』*Les Ténèbres*として発表されるはずであったこの二部作のライトモチーフであり、夜の濃密な空気を吸い込むノルマンディの牛は、夜のアパルトマンで恐怖に震えるド・クレルジュリーと見事なコントラストをなす。

「朝から晩まで、ブラインドを閉めておいても、焼け付く太陽のもとで砂利の聞こえるか聞こえぬかの弾ける音が聞こえる、そして夜になれば、微風がのぼり、熱気や牛小屋の臭いがする。昼のあらゆる力は、根の樹液や淀んだ水底の葉のように、分解される。牧場ではまだ湿っている垣根にそって、一日中まどろんでいる首の短いノルマンディの牡牛がゆっくり、縮れた頭をもたげ、首から尻まで歓びに身震いし、その黒い唇をめくりあげてこの濃密な空気を吸い込む。」(JOIE pp.628,9)[5]

2

Ⅱ－3の冒頭の風景の描写は、色彩の「オーケストラ」で、印象派の光と影、それもより強烈なゴッホの筆致、さらにはフォーヴの色彩の横溢をさえ感じさせる。

「陽の光は天頂から、斜めの広い幕となって射しこみ、白い高い石にそって流れ落ち、黄色や深紅のダリア、ピンクや白のカーネーションで芝生の四隅に様々な色の房となって湧きだし、最後には縁の暗い緑の影に吸い込まれていく。しかし、言うなら、オーケストラの密度の濃い緯糸にはめこまれたシンフォニーの主題は別のところにある。広大な光の広がりは空中で、なにか透明な暗礁にあたって砕け、目に見えぬ風は戯れのごとく光と泡を散らし、いちばん届きそうにないところ、濃い影の斜面の凹地や、リラの茂みのもっとも奥の葉や、黒松の梢にまで飛び散らした。短い炎の一時の波が小枝の間を、真っ赤な小さな舌のように走るとき、陽射しの広大な、一面の爆発と言うよりは、乾き切った雑木林の油断のならぬ火事のようだった。というのはあまりに重い夏のある時間など、自然は輝く愛撫に身を開き横たわる代わりに、黙って、狂暴に蹲り、脇腹の急所に、勝者の顎ががぶりと噛み付くのを感じた餌食の呆然としたあきらめで動こうとしなかった。そして、じっさい、どんよりした空から激しい雨、白熱した槍のごとき、地球の無数の吸引力が思い起させるのはこの噛み傷、無数の細かい入念な噛み傷、大きな噛みあとであった。」(JOIE pp.648, 649, 下線筆者)[6]

8月の過重な光の横溢のなかで、急所に噛み付かれ蹲る動物のイメージは、のちに『田舎司祭の日記』の冒頭で、倦怠にむしばまれた教区を眺めながら思いやった、11月の霧雨のなかで咳をする、牛飼いの少年につれもどされた牛たちのイメージ(JCC p.1031)のモノトーンと様々な点で対照的である。

それにしてもこのめくるめく色彩は何を意味するのであろうか。この風景描写のあと、ラ・ペルーズとフィオドールの対話、祖母の譫妄状態の混乱、そうした事態を前にしたシャンタルとラ・ペルーズの対話...なんらかの狂気を誘発する前触れか。

3

Ⅱ－4では、シャンタルは疲労と昏迷状態のなかに打ち棄てられ、シュヴァンスの臨終の恐怖――彼の死が与えたとも思える教訓――を思い起こし、すべてをなげうとうとする誘惑のなかで、身を起こして運命の審判を果敢に待てと命ずる内奥の声に従い、光の戻るのを待つ。ここでシャンタルの感じる苦悩には、何らヒロイックなものはなく、ありふれた、みじめなものである。

「わたしは自由だ」je suis absolument libre.と自分に言い聞かせながら、目の前に見いだすのは「生暖かい、息詰まる闇」l'ombre tiède, étouffante（JOIE p.677）なのである。そのときシャンタルは、「今と比べれば、ほんの一時間か二時間前まで、どんなに幸せだったか」と光の戻ってくるのを待ちながらも、じっさいに彼女が待っているのは「夜であり、空虚、転落、あの急速で甘美な滑落」la nuit, le vide, la chute, ce glissement rapide et doux.（JOIE p.678）であることに気づいていた。

『闇』*Les Ténèbres*のテーマが、このle jour - la nuitの二つの世界の対比のうちに現われる。シュヴァンスの臨終の恐怖に、自分の「よろこび」をさしだしたシャンタルに開かれたのが、この夜の闇であるとするなら、対比される昼の光景こそ「よろこび」la joie du jourなのである（JOIE I-2, p.552, 拙稿、前出 p.109参照）。

シャンタルは「よろこび」を臨終のシュヴァンスにさしだしたときから、自分がひとりで闇を引き受けることを知っていた。ただ、彼女は何のヒロイズムもなく、「自分のつましい運命のありうる象徴としてこれを受けとめていた」（JOIE p.679)。

ここでは、本論のはじめで見た風景の変貌と同じく、日常生活の光景が、相貌を変えて彼女から遠ざかって行く。

「窓が閉まっていたのに、三重のチュールのカーテンにもかかわらず、いま、フェルナンドの怒った声、ポンプにバケツのぶつかる音、甲高い笑い声が聞こえていた。はじめ、なにかうんざりした、信じがたい驚きを感じながら、そうした物音が、別

の岸からささやく水の途方もない広がりをこえてきたかのように、耳を澄ました。それから、一瞬一瞬、自分が愛したこうした存在からどうしようもなく遠ざかって行くように思えた。彼らのためにもう何もできないだろう、彼らのちっぽけな存在以上に、彼らの悲しみの、彼らの嘘の秘密を失ってしまったのであろう、彼らとの間の憐れみの天上の絆は永遠に切れてしまうであろう、もう彼らに同情することも、彼らのとらえがたい苦しみを分かち合うこともできなくなるのだ、という思いが閃光のようによぎった。」(JOIE pp.679,80)[7]

4

シャンタルがたびたび陥った、そしてそれをたまたまフィオドールに目撃されていた忘我の状態、幻影の世界のなかに吸い込まれていくさまは『新ムシェット物語』のムシェットが水中に斜面を転がり落ちる場面と同じイメージが見られる。水のなかに沈みこみ、からだを覆う水音を聞くイメージは、ムシェットが沼の岸から身を沈める最後の場面に再び用いられる(NHM p.1345)。

un arrachement de l'être (JOIE p.681)	sentir la vie se dérober (NHM)
elle crut entendre se refermer sur elle une eau profonde (JOIE p.681)	L'eau insidieuse glissa le long de sa nuque, remplit ses oreilles d'un joyeux murmure de fête (NHM).

ムシェットの鼻孔には墓の匂いが立ち上り、物語は幕を閉じるが、シャンタルでは「光はあらゆる方向から溢れ出、全てを覆った」(JOIE p.681)。この一瞬の世界の反転はドニサンとサタンの闘いなどでベルナノスがしばしば用いている手法である。

「わたしはいったい何を探していたの、ド・クレルジュリー嬢は考えた、わたしはどこにいるの。（彼女は一つ一つに見慣れたものの姿を認めたと思っていた、彼女はいまでは、それらのものを別の光のなかに浸るあの内的な視線でつつみ、抱き締められたかのごとくであった。）主の御手のなかにかえることがそんなに難しかったのでしょうか。いまそこにいるの。」（JOIE p.681）[8)]

ここではこれまで風景＝彼女の身のまわりの世界の変貌の変奏が終楽章にいたり、シャンタルにもつ意味が、現われてくる。最後の障害を飛び越え、神のうちに身を滅ぼそうとでもするかのように、この溢れる光を自己の存在のただ一点に集め、光の波は一瞬静止するが、苦悩が再びあらわれ、キリストの橄欖の園での苦悩と重なる。

「この人のいない丘に微風も途絶え、すっかり静まり返っていたにもかかわらず、ド・クレルジュリーの娘は樹皮のしたに、木のねじくれてはいるが力強い四肢と深くはった根が苦しみ、きしむのが聞こえるように思えた。それから、梢の先が震えているのを見、その震動は葉から葉へと伝わり、怪物じみた頭が、ゆっくりと苔と樹皮の殻を引き裂き、おぞましいいかめしさをたたえてまわりはじめた…。しかしシャンタルを前に押しやったのはこれほどグロテスクな恐れより、こうした悪夢が彼女の忘我の状態の終わりをしるすものではないかというおぼろげな恐れだった。彼女はもう一度目で障害をはかり、踏みつけた。」（JOIE p.686）[9)]

ドニサンの前に現われた悪魔は、ここではねじくれたオリーヴの木となりシャンタルに踏みつけられ、セナーブルの姿に変わる。

結　論

ノルマンディの夏の風景は、空に立ち上るかすかな煙のごとく、シャンタルにとって、親しく見慣れた、ささやかな日常生活の舞台であり、夏の光のもとで色彩の溢れるキャンバスであった。それは『欺瞞』のゲルーのサロンや、セナーブルの彷徨したパリの夜と対照をなす。しかし、この陽射しは、アカデミーの椅子をあきらめきれないド・クレルジュリーの鎧戸を閉ざした

サロンにとって眩しすぎる。シャンタルは父親との対話からこの陽射しに身を投げ出す。

ベルナノスの世界に親しい精神的風景とでもいうべき夜の闇 *Les Ténèbres*をタイトルとして書かれるはずであった作品の第二部である『よろこび』の世界の転換を表すのが、シャンタルの目に映る風景の変容であった。このシャンタルに親しい風景こそシャンタルの「よろこび」の源であったが、シャンタルがシュヴァンスの臨終の苦悩を前に彼女が自己の「よろこび」をさしだしたことにより、風景もまたシャンタルにとって、橄欖の園と重なるものとなった。

注

テキストの引用はプレイアッド叢書*BERNANOS Œuvres romanesques*, 1988による。

SSS : *Sous le Soleil de Satan*
JOIE : *La Joie*
IMP : *L'Imposture*
JCC : *Le Journal d'un curé de campagne*
NHM : *Nouvelle Histoire de Mouchette*

1）「独仏文学」第25号、1991年。

2）Et soudain, pareil à ces paysages trop lumineux, trop vibrants, que submerge d'un coup le crépuscule, et qui réapparaissent lentement, méconnaissables, semblent remonter de l'abîme de la nuit, l'étroit univers familier dans lequel elle était née, où elle avait vécu, prenait un aspect nouveau. Il semblait que les choses elles-mêmes lui fussent devenues étrangères, jusqu'à cet ameublement prétentieux et désuet, d'une richesse sans fantaisie, d'une sévérité sans noblesse, académique et bourgeois, de professeur millionnaire. (JOIE pp.562,3)

3）Sa tendresse filiale elle-même avait résisté un temps, puis s'était changée en un sentiment moins simple, et sans qu'elle y pensât, l'image de son père avait perdu un à un ses traits familiers, s'était pour ainsi dire fondue dans l'ensemble, achevait de s'effacer parmi

les ombres. Qu'ils étaient loin d'elle, tous! Qu'ils étaient errants et malheureux!..... (JOIE p.563)

4) Elle pouvait lire dans ces reliefs et ces creux, comme sur une stèle funéraire, l'histoire même de sa race, la dure empreinte marquée par les siens dans la cire informe du temps. Cette double ride de la joue, c'était celle de l'oncle Antoine, le rire pincé, grimaçant, dont il accueillait le fermier prodigue, la servante enceinte, un braconnier....(JOIE p.615)

5) Du matin au soir, en dépit des persiennes closes, on entend le crépitement presque imperceptible du gravier sous le soleil torride, et quand vient la nuit, l'espèce de brise qui monte sent la fièvre ou l'étable. Toutes les puissances du jour s'y retrouvent décomposées, ainsi que les sucs des racines et des feuilles au fond d'une eau dormante. Dans les pâturages, le long des haies encore tièdes, les taureaux normands à l'encolure courte, qui ont somnolé tout le jour, dressent lentement leur tête crépue et, frissonnant de plaisir, du garrot à la croupe, aspirent cruellement cet air épais, en retroussant leurs lèvres noires. (JOIE pp.628,9)

6) Le jour glissait du zénith, par larges nappes obliques qui venaient ruisseler le long des hautes pierres blanches, pour rejaillir en grappes multicolores aux quatre coins des pelouses jaunes et pourpres avec les dahlias, roses et blanches avec les œillets —— jusqu'à se perdre dans le vert assombri des bordures. Mais ce n'était pas là, si l'on peut dire, que le motif principal de la symphonie serti dans la trame serrée de l'orchestre. La nappe immense s'était brisée en l'air sur quelque récif translucide, et le vent invisible en éparpillait l'écume comme par jeu, aux endroits les plus inaccessibles, au creux d'un talus plein d'ombre, à la dernière feuille d'un buisson de lilas, ou à l'extrême pointe du pin noir. On eût dit moins la vaste, l'universelle explosion du jour que l'embrasement insidieux d'un taillis bien sec, lorsque l'ondulation instantanée de la flamme court d'une brindille à l'autre, ainsi qu'une minuscule langue écarlate. Car à certaines heures d'un été trop lourd, la nature, au lieu de s'ouvrir et de s'étendre sous la caresse brillante, semble au contraire se replier sur elle-même, muette, farouche, dans l'immobilité, la

résignation stupide d'une proie qui a senti se refermer dans son flanc, au point vital, la pince des mâchoires du vainqueur. Et c'était bien, en effet, à la morsure, à des milliards et des milliards de petites morsures assidues, à un énorme grignotement que faisait penser la pluie raide tombée d'un ciel morne, l'averse des dards chauffés à blanc, l'innombrable succion de l'astre. (JOIE pp.648,649)

7) En dépit des fenêtres closes, et la triple épaisseur des rideaux de tulle, elle entendait à présent la voix furieuse de Fernande, le choc des seaux sur la pompe, un rire aigu. Elle écouta d'abord avec une sorte de surprise exténuée, presque incrédule, comme si ces bruits fussent venus d'une autre rive, à travers une immense étendue d'eau murmurante. Puis il lui sembla que chaque fraction de seconde l'éloignait irréparablement de ces êtres qu'elle avait chéris. La pensée que, dans un instant, elle ne pourrait sans doute plus rien pour eux, qu'elle aurait perdu mille fois plus que leur chétive présence, le secret de leur tristesse, de leur misère, de leur mensonge, que le céleste lien de la pitié serait entre eux à jamais rompu, qu'elle ne pourrait plus les plaindre, partager leur souffrance obscure, la traversa comme un éclair. (JOIE pp.679,680)

8) 《Qu'ai-je donc cherché? se dit Mlle de Clergerie. Où étais-je? (Elle croyait reconnaître un à un chaque objet familier, il semblait qu'elle pût désormais les envelopper et les étreindre de ce regard intérieur qui baignait dans un autre jour.) Était-il donc si difficile de me remettre entre Ses mains? M'y voici.》 (JOIE p.681)

9) Bien que sur ce plateau désert le silence fut absolu, la brise tombée, Mlle de Clergerie croyait entendre peiner et craquer sous l'écorce les membres noués mais puissants de l'arbre, et ses racines profondes. Puis elle vit frémir la pointe extrême des branches, et la vibration s'en transmit de feuille en feuille jusqu'à ce que la tête monstrueuse, déchirant lentement sa carapace de moussse et d'écorce, ce mit à tourner sur elle-même, avec une gravité hideuses... Mais ce qui jeta Chantal en avant fut moins l'horreur consciente, qu'un tel cauchemar ne marquât la fin de son extase. Elle mesura des yeux, une dernière fois, l'obstacle, et marcha dessus. (JOIE p.686)